

Title	イーヴンスン著 アメリカ炭礦業史
Sub Title	Eavenson, H.N., The first century and a Quarter of American coal industry. Pittsburgh, 1942.
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.7/8 (1949. 8) ,p.460(90)- 464(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19490801-0090
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490801-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

者)、農民、自由業者等——に於て、主體的なものとして見出したのである。のみならず、かゝる階級がプロテストантиズムの擔ひ手であり、ニュー・イングランドやフロンティアがプロテストантиズムの地盤であつた事實(工場分布との關係)と思ひ合せるならば、上述の結論は決して偶然的な獨斷論ではないのである。又第四節にも詳細に論じた如く、アメリカ鐵工業が、農業と如何に堅く結付いてゐたか、又農業(農村)、從つて國內市場と堅く、深く結合してゐる事によつて、如何に後年の素晴らしい發展をなし得たか——こゝにアメリカ資本主義の型が打出されてゐる——といふ事實(獨立、南北兩戰爭を契機として、軍需と農具需要に應ずる飛躍的發展は忘れられてはならぬ事であるが)を今一度想起するならば、我々は斯學の開拓者、かのアダム・スミスと共に

「かゝる製造業は農業の末裔である。」
とその性格を規定出来るのである。

終に繰返し云ふならば、右の結論は、筆者の研究方法の不備、未熟なるを除けば、調査對象の絶對的不足(特に時代を遡る程著しい)、希望事項の無記載によつて、かなり制約をうけた事は事實である。その意味でこの結論は、極めて相對的である事を、筆者は強調せざるを得ない。

三田學會雜誌 第四十二卷第七・八號

八九 (四五九)

イーヴンソン著「アメリカ炭礦業史」

九〇 (四六〇)

イーヴンソン著

「アメリカ炭礦業史」

高 村 象 平

ここに紹介しようとする Howard N. Evenson, The First Century and A Quarter of American Coal Industry. (Pittsburgh, PA. 1942.) は題して「アメリカ炭礦業百二十五年史」といふが、八折判七百餘頁の紙幅に収めるところは(一)約千三百の未刊既刊の諸資料の中から一七五八——一八八五年の合衆國各州における炭礦業關係の記録を抜萃集録した本文と、(二)右年間の石炭の生産及び輸送に關する八十餘の詳細な統計表とを、主内容とし、これに附録三篇、附圖大小十四葉を添ふものである。即ち研究書といふよりはアメリカ炭礦業史料集と稱すべきものである。著者の自序によれば、これ等資料の蒐集に八年の歳月をかけたといふが、この大著を私家版行された著者の勞を多とせざるを得ない。

著者はいふ「往時の調査報告書乃至統計には缺陷多く、一八三〇年に始まる聯邦の石炭調査も不完全であつて、眞に依據し得る數字は一八八〇年に至つて初めて作成されたといつて過言

5。(一九四九年七月六日稿)

「附記」

本稿は屢々引用した社会經濟史學十四ノ一所載の鈴木圭介氏「合衆國初期の經濟政策」なる論文は同氏著「アメリカ經濟史研究序説」(日本評論社)に第二論文として收録されてゐる。

ではない。しかもこの時期以前の炭礦業者の間には、自己の炭實績の公表を嫌ふ傾向が強かつた」と。これを讀んで、何處でも類似の現象は存するものとの感が深い。植民地時代以來、獨立後においてすらも潤澤な薪炭を以て主要燃料としたアメリカで、炭礦業の發達がをくれたのは當然のことであつた。従つて著者が合衆國出炭推定量として州別に提示する統計(Dp. 482—)は、一八〇〇年を起點とせざるを得なかつた。しかもその數字は從來發表されて來たものとかかなりの開きがあるが、著者はこれを以てしても尙實際の出炭量より下廻るものとしてゐる。ともあれここにはその一部分——十年毎の合衆國出炭總量(無煙炭と瀝青炭との合計量)を掲げて讀者の參考に資する。(單位、米噸=二〇〇〇封度)大ざつぱにいつて出炭量は十年毎に略々倍加してゐることが知られよう。

ここには轉載を省略したが、この期間に惹起した三〇年代、五〇年代、七〇年代の恐慌に際して出炭量は殆んど減退を示してゐない。高々兩三年間横這ひの姿であつてその後再び上昇に轉じてゐる。尙この統計は 1 bushel = 80 lbs, 25 bu. = 2000 lbs = 1 net ton. を單位としてゐるが、當初イギリス本國及びノーヴァ・スコシアから石炭を輸入した東部沿岸諸地では、一八三〇年頃まで謂ゆるロンドン・チャルドロン(1 chaldron = 36 bushels = c. 2680 lbs 即ちニュキャッスル・チャルドロンの半量)乃至ピクトウ(ノーヴァ・スコシア)チャルドロン(= 3456 lbs.)を計量單位として使用してゐた。(イギリス

年 度	従 来 の 統 計	著者の推定量
1800年	200,000 ⁽¹⁾	108,350
1810年	—	178,500
1820年	500,000 ⁽¹⁾	333,765
1830年	1,300,000 ⁽¹⁾	830,899
1840年	1,800,000 ⁽¹⁾	2,474,319
1850年	6,455,681 ⁽²⁾	8,355,739
1860年	16,661,167 ⁽³⁾	20,040,859
1870年	33,035,580	40,429,070
1880年	73,264,625 ⁽⁴⁾	79,406,831
1885年	107,332,630 ⁽⁴⁾	110,109,332

- (1) M. G. Mulhall, Dictionary of Statistics (18-92) に據る。
 (2) E. W. Parker, Special Report on Coal Mines and Quarries (1902) に據る。
 (3) U. S. R. R. & Mining Register (Jan. 12, 1861) に據る。
 (4) U. S. Geol. Survey, Mineral Resources (18-85) に據る。

における計量単位については Robert L. Galloway, Annals of Coal Mining and the Coal Trade, London, 1898, Vol. I, pp. 48, 86, 146, に記載されてゐる。然しこの単位は漸次に廢され、代つて前世紀末まではブシエルを以てする慣行であつた。ブシエルは體積としては恒に二六八八立方吋であるが、石炭の重量を測る場合には地方によつて異なり、更に同一州でも時を異にするに従つてその内容は相違した。大體は一ブシエル

三田學會雜誌 第四十二卷第七・八號

イーヴンソン著「アメリカ炭礦業史」

216 bushels, 10 barrels = 1 net ton が用ゐられたことがあつた。これ等の度量衡を識えることは、資料の分析に當つて缺くべからざる準備であり、しかも往々その内容不詳のため究明し得ぬことがあるので、敢てここに綴述した。

著者が本書において各州の炭礦業事情に關する資料を年代を追つて摘録するに際し、ヴァージニア、ペンシルヴェニア兩州のそれが最も詳しい。前書(一三〇頁に互る)は本書の取扱ふ時間的限定の故に、後者(一四〇頁に互る)は該州に埋藏される大炭田の故に、生じた結果であるといつてよい。オハヨー、インディアナ、イリノイ諸州も豊富な炭田の所在を以て知られるのであるが、その開發が比較的遅れたため、本書では夫々に二十頁内外の紙幅しか與へられなかつたと推測される。ここに紹介者の特に興味を惹いた箇所を挙げると、その一は、一七九七、九八兩年度のヴァージニア州ルイザ及びグーランド兩カウンティの炭坑の收支計算書である。(pp. 60-2)。Morris 氏の報告より轉載した記録であつて、これを通じて該炭坑の炭量の外に、當時の奴隷及び労働者・監督に對する給與額、石炭運搬費、運河通行料、炭礦・車輛・舟艇修理費等々の内容をかなり詳細に知ることが出来る。(當時坑内夫として使役された奴隷の價格は一七九八年には十九磅であつたが、翌年には十九磅七志半、一八〇〇年には二十磅と上昇してゐる。)この生産者の賣價は、一磅四弗八六仙とすれば、噸當り三弗七五仙乃至四弗であつた。この頃ヴァージニアにおいては既に石炭を馬で運搬

Ⅱ八〇封度であるが、左にこれと相違するものを摘記する。

州 名	無煙炭	瀝青炭	石 炭
インディアナ	—	—	七〇 ⁽⁴⁾
ケンタッキー	七六 ⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾	七六 ⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾	八〇 ⁽⁴⁾
ミシガン	八〇 ⁽³⁾	六〇 ⁽³⁾	—
モンタナ	—	—	七六 ⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾
オハヨー	—	八〇 ⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾	七〇 ⁽³⁾
ペンシルヴェニア	七五 ⁽³⁾	七六 ⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾	七六 ⁽⁴⁾
ヴァージニア	—	—	九〇(Coal pits) 七二(Coals)
リッチモンド	—	—	—

(註) (1) 一九〇四年調査、(2) 一九一二年、(3) 一九二六年、(4) 一九三九年。

次に、初期には二二四〇封度の謂ゆる英噸(Long ton)が普通用ゐられ、關稅法では一八四二年以降これが採用された。(= 28 bushels) 無煙炭業界では一九二〇年代の中頃までこれを存続したが、これに對して瀝青炭業界では二〇〇〇度の米噸(net ton)が早くから使用され、前世紀末既に中西部ではこれが基準となつた。一九二三年の合衆國石炭調査委員會の勸奨に従つて、現在ではこの米噸で使用されてゐる。これ等の單位の外に、ニュオーリエンズ及びミシシピ州では、1 barrel =

九一 (四六一)

九二 (四六二)

することが行なはれてゐるが、ピッツバーグ地方では一八三〇年代に至つて初めてこれが利用された。ピッツバーグの資料の中では、一八三三年十一月同市のギャゼット紙に掲げられた同市の工場調査が興味深い。(pp. 186-7) それによれば、當時既に製鐵工場は同市工場總數(炭坑を除く)の四割近くを占め、その蒸氣機關の動力量は半ば以上であり、全工業労働者の半數を雇ひ、石炭消費量は全體の六割餘に達してゐたのである。次に炭層を切る機械が、一八七三年インディアナ州ブラジル近傍の炭坑で試用された。五馬力の蒸氣機關を用ゐ、二十四時間に百噸の石炭を切り得ると稱した(pp. 377)。合衆國で發明された最初の石炭機械である。同州の炭坑經營の内情は、ハミルトン・スミス(ニュイイングランドの資本家により五十萬弗の資本と七千エーカーの礦區とを以て一八三七年同州カンネルトンに設立された American Cannel Coal Company の支配人)の報告書(一八五七年)からその一斑を窺ふことが出来る(pp. 238-9)。坑内夫に對する賃銀は平均四九弗(高給者は六〇乃至八〇弗)、彼等は概ね英蘭やウェールズの炭坑から移住して來た者であつた。前掲ヴァージニアの炭坑の場合に比して、諸事情は異なるが、ともかく數倍する高賃銀が機械採用を促すといふ一證たり得る。

然しながら右の炭層切機械は未だ試用の域を出ず、この外に蒸氣又は壓搾空氣による機關車なりポンプなりが使用され、或は畜力を以てする小車輛の軌道運搬が行なはれてゐたとい

へ、一八八五年以前には事實上合衆國炭坑におけるすべての坑内作業——採掘乃至積出は、人力——手の力によつてゐたのであつた。當時は日産千噸の炭坑は大炭坑と看做された。一八八〇年の國勢調査によれば、二、九九四の瀝青炭坑の平均出炭量は年間一四、二六九噸、(最大の炭坑の出炭量は三三萬二千噸)、二七七の無煙炭坑の平均出炭量は一〇三、三二七噸(最大は年間四五萬噸)。既に一八五四年に生じた瀝青炭出炭量の無煙炭量凌駕は、爾來着々その隔差を擴大して行くのであつた。周知の如く第十九世紀前半のアメリカ炭礦業は無煙炭の全盛時代であつたが、それは太平洋沿岸の人口稠密な地方に埋藏されてゐたといふ事情に負ふところ渺なくない。然し蒸汽機關や工場における石炭消費量が増加し、他方木材の供給が減少すること明白な事實となるに及んで、廉價であり且つ一層廣汎な地域に分布する瀝青炭に對して業者の注意が向けられて行つた。かくて第十九世紀後半に、多くの新坑は開かれ又舊坑は擴大されて、以て石炭需要の増大に應じたのである。しかも出炭能力は實際の需要量を常に上廻つてゐたために、業界の競争は激しかつたが、需要の絶えざる増加によつて破滅的競争に陥ることはなかつた。

著者の言に従へば、合衆國において營利的採掘が行なはれ初めてから百二十五年間、即ち一七五八——一八八五年に、多數の小經營より構成される一大産業——炭礦業が徐々に創り出された。(一八八五年以前に大炭坑會社は無煙炭田地方以外になく、

三田學會雜誌 第四十二卷第七・八號

九三 (四六三)

味深きものを覺える。

イーヴンソン著「アメリカ炭礦業史」

九四 (四六四)

アメリカ炭礦業初期の發展の諸記録を蒐集してこれを本書に公刊した著者は「一八八五年以後の甚だ増加した諸資料の中から、埋藏されないうちに斯業の記録を集めて、これを完成せんことを、將來の史家に望む」といつて本文を結んでゐる(註文)。本稿の最初に述べたやうに、本書は實質上史料集であつて、その限りに對して批評を下す餘地に乏しい。本書に收められた引用文には、アメリカ炭礦業の發展には關係の薄いやうなものも散見する。又かなり長文のものも少なくない。それ等は前記附録第二の場合のやうに稀觀である故か、或は石炭についての現在の觀點が往時のそれと甚だ異なつてゐるからか、出でるものといつてよい。本書に掲げられた諸資料を利用する者の立場からいへば、著者が原資料を敷衍して解釋したり推論を下したりする場合よりも、本書における如く原資料を生のまま掲載されてゐる方が遙かに利用價值が多い。當時の見解や諸事情を知るにも、原典に直接接することが却つて最も捷徑である。このやうに考へて、本書の公刊をここに紹介することにしたのである。(固みに本書は東京上野の國立圖書館に收藏されてゐることを附記する。)

それも全出炭量の二・一%以上に出ることはなかつた。(p. 45)

炭礦業は合衆國の礦業生産においても、國民經濟構造においても、重要な地位を占めるに至つたのである。それにも拘はらず、諸炭坑は廣大な地域に散布するが故に一般世人はこの成長を認識すること少なく、彼等は僅かに燃料不足乃至勞働爭議發生の時にのみこれに注意を拂つたに過ぎなかつたのが實情であつた。この他方、總じていへば、少なくとも一八八五年以前のアメリカ炭礦業は、その投下資本額に比して多額の利潤を擧げた。然し斯業は甚だ有利な産業とはいひ得ないのであつて、炭坑經營者よりは炭坑所在の土地の投機者及び該地の貸地人が一層多くの金銭的利益を獲得したのであつた。(p. 46)

本書の附録第二には、一八一四年ピッツバークで發行された「The Western Cleaner」誌に三號に互つて連載された論文「石炭について」(執筆者不詳)が、稀觀文獻として再録されてゐる。(p. 53-61)その内容は、炭礦業においても先進國であつたイギリスその他における當時の一般の見解を、石炭の自然史、採掘、坑内の爆發瓦斯に伴ふ諸現象、コークス製造法、タール蒸溜法、瓦斯燈等の諸項目に分つて、披瀝したものである。著者の紹介の辭によれば、アリゲニー山脈以西で刊行された石炭に關する最初の論文であり、合衆國における文獻中最も古きものの一つに屬する。その意味で一讀し、これをカルドックス採炭法の如き擧進速度の増大、坑内爆發の絶滅を期した炭坑科學の進歩を示してゐる合衆國の現状と對比するならば、與

前號 (第四十二卷) 目次

論 說

公共經費の效果の可測性について……………高 木 壽 一
比較靜學・極値條件と安定條件……………福 田 正 夫

資 料

理論經濟學の若干の基礎……………
支出擴張線について……………辻村江太郎

研究指針

會 計 學……………小 高 泰 雄
日本農業問題……………島 崎 隆 夫

書 評

Bruno Lasker, Asia on the move, 1945…山 本 登